

## 謙譲語 確認テスト（古典敬語） 解答・解説

### ■ 解答・解説

問1 言ふ。／「申す」は「言ふ」の謙譲語で、言う相手（受け手）を高める。

問2 本動詞。／①は「言ふ」そのものの代わりに用いられており、単独で動詞として働く本動詞。

問3 大臣。／①は「大臣に申す」で、申し上げる相手＝大臣を高める。

問4 言ふ。／「聞こゆ」はもと「言ふ」の謙譲語。「(人に) 申し上げる」の意。

問5 姫君。／②は「姫君に聞こえ (て)」で、申し上げる相手＝姫君を高める。

問6 帝（天皇）。／「奏す」は天皇に申し上げるときに限って用いる謙譲語。

問7 中宮・東宮（皇后・皇太子）。／「啓す」は中宮や東宮（皇太子）に申し上げるときに用いる謙譲語。

問8（上に）差し上げる。／⑤「奉る」は「与ふ・献上す」の謙譲語で、差し上げる相手＝上（帝）を高める。「帝に珍しい果物を差し上げる」の意。

問9（宮に）差し上げる。／⑥「参らす」も「与ふ」の謙譲語。「宮に名高い琴を差し上げる」の意。

問10 もらふ（受く）。／「給はる」は「もらふ」の謙譲語で、くれる相手を高める。⑦は親王から馬を頂戴する意。

問11 参上する（伺う）。／⑧「参る」は「行く・来」の謙譲語。「翁は明日必ず御前に参上するつもりだ」の意。

問12 退出する（おいとまする）。／⑨「罷る」は貴所から「退出する」意の謙譲語。「暇をいただいて夜更けに里へ退出する」の意。

問13 訊：お仕え申し上げる。／敬意の方向：仕える相手＝女院への敬意。⑩は「長年、女院にお仕え申し上げている」の意。

問14 聞く（受く）。／「承る」は「聞く・受く」の謙譲語。「うけたまはる」とも。

問15 思ふ・知る。／敬意の方向：はっきりした特定の受け手はなく、話し手が自分の動作（思う・知る）をへりくだって述べる謙譲語（自分を低めて聞き手への丁重さを表す用法）。「われよく存ず」で「私はよく存じております」の意。

問16 補助動詞。／⑬「読み奉る」は「読む」に付いて敬意を添えており、補助動詞。「お読み申し上げる」の意。

問17 帝（上）。／⑬は帝の御前で文を読む動作で、読んで差し上げる受け手＝帝を高める。

問18 補助動詞。／⑭「語り聞こゆ」は「語る」に付く補助動詞。「お語り申し上げる」の意。

問19 補助動詞。／⑮「知らせ申す」は「知らせ」に付く補助動詞。「お知らせ申し上げる」の意。

問20 (例) 大臣に、急いでお知らせ申し上げます。／「知らせ申す」の「申す」を「お～申し上げます」と訳し、受け手である大臣への敬意を表す。

---

問21 (ア) 召し上がる (尊敬語)。 (イ) 差し上げる (謙讓語)。／同じ「奉る」でも、(ア)は高貴な人が主語で「飲む・食ふ」の尊敬語、(イ)は話し手が主語で「与ふ」の謙讓語。主語と文脈で判断する。

---

問22 (イ)。／(イ)「御衣を奉る」は「お召しになる (着る)」の尊敬語。(ア)(ウ)は「差し上げる」の謙讓語。

---

問23 (例) どちらも「(貴人に) 申し上げます」という意味の謙讓語だが、申し上げますの受け手が異なる。「奏す」は相手が天皇 (帝) であるときに限って用い、「啓す」は相手が中宮 (皇后) や東宮 (皇太子) であるときに用いる。同じ「申し上げます」でも、最も高い天皇への場合は「奏す」、それに次ぐ中宮・東宮への場合は「啓す」と、受け手の身分によって語を使い分ける点に違いがある。

---